

エリノア・オストロム先生は来日する機会は2度ほどしかなかったようであったが、そのわずかの来日機会に地球研との繋がりを持ってくださったことは地球研にとって非常に幸運であった。

今から7年前の2005年10月にドイツのボン大学で行われた「地球環境変化の人間の側面に関する国際研究計画」IHDP (International Human Dimensions Programme on Global Environmental Change) 第6回オープンミーティングでオストロム先生は科学委員会のメンバーを務めていた。この大会に初めて地球研が参加し、ブース展示とセッション企画を行った。地球研の最初のプロジェクト評価委員会委員であったボン大学の Ehlers 先生が IHDP の初代科学委員会委員長を務めていたこともあり、地球研は IHDP への参加を非常に歓迎された。この時に地球研から参加したのは研究協力課から前野さん、大畠さん、研究部から佐藤洋一郎先生、そして私の4名であった。私がコンビーナを務めるセッションでトルコ・セイハン河流域の灌漑組合の報告をした時に、セッション終了直後にある先生が演台までやってきて彼女の著書を私へ進呈してくださった。その時はじめて会場の後方で盛んに鋭い質問を発していた方がコモンズ研究の権威であるオストロム先生だったということが分かった。地球研のブースへも Carl Folke と一緒に来てくださった。さらにその後私の元へ著書を5冊ほどまとめて送ってくださったことには非常に感激した。

その後メールでやりとりをしながら、2006年7月3日に京都国際会館で開催された第3回環境経済学世界大会の基調講演に環境経済政策学会から招へいされたのを機会に、講演の前日に、オストロム先生に当時上賀茂に完成したばかりの地球研に来ていただき、第12回レジリアンス研究会（レジリアンスプロジェクト、コモンズ研究会、琵琶湖淀川プロジェクトの共催）でご講演いただくことが出来た。オストロム先生は出版したばかりの著書“Understanding Institutional Diversity (2005)”の中からゲーム理論を駆使した最先端の制度理論を地球研で紹介してくださった。難しい理論をわかりやすい言葉で説明する彼女の能力には素晴らしいものがある。日本での講演機会がほとんどなかったため、この地球研でのセミナーが日本における彼女の最初で最後のオープンセミナーとなった可能性が高い。次の日は来日のメインイベントである環境経済学世界大会での基調講演を終了した後すぐに帰国の途についた。前年に IHDP で発表した私の灌漑組合の論文を持ち帰り、帰路の飛行機の中で読んで数日後にコメントを送ってくださったことにはとても感激した。この京都に滞在したわずか3日間の中に多くの若手研究者と交流を持ってくださったのみならず、ひとりひとりの研究テーマを聞いて非常に興味を示してくださった。

2007年6月にドイツのライプチヒにあるヘルムホルツ環境研究センター (Helmholtz-Centre for Environmental Research-UFZ)においてヨーロッパ・エコロジー経

済学会(European Society for Ecological Economics)が開催され、オストロム先生は基調講演に呼ばれていた。大会テーマは「持続性のための自然科学と社会科学の融合」Integrating natural and social sciences for sustainability であった。私は地球研のプロジェクトの成果であるトルコ・セイハン河下流域土地利用の温暖化による将来予測を発表した。この時もオストロム先生がセッションに参加しており、私の発表にコメントをくださった。

オストロム先生が地球研に送り込んで来たインディアナ大学の研究者が Tom Evans である。Tom は地球研の招へい外国人研究員として地球研に2度長期滞在した。彼は自然地理学の専門でエージェント・ベースモデルを使った研究をしている。オストロム先生が主宰していたインディアナ大学・政治理論と政策分析ワークショップ(Workshop in Political Theory and Policy Analysis)の共同研究者でもあり、今後はこのワークショップの Co-Director として中心的な研究者となる予定である。

2009年秋にオストロム先生がノーベル経済学賞を受賞したというニュースには驚いたが、彼女の業績が与えたインパクトの大きさを考えれば受賞は至極当然のことだったと考える。この1年ほど前にオストロム先生が地球研のプロジェクト評価委員会委員へ推薦され、私をご本人への打診をすることになったが、残念ながら2年先までスケジュールが埋め尽くされており、その時は丁重に断られた。2010年度に地球研が毎年開催に関わっている「KYOTO 地球環境の殿堂」入りに選ばれた時も残念ながら来日はかなわなかった。

ノーベル賞を受賞した直後から地球研の意向もあり、来日していただくために少しずつコンタクトを続けていたが、2011年にアリゾナ州立大学で開催された Resilience2011 大会の直後にインディアナ大学のワークショップへ寄る機会があった。その時の約束でオストロム先生に2013年のコモンズ学会世界大会(IASC)の前に京都へ寄っていただくことになっていた。私たちの願いが果たされる前に逝去されたのはとても残念である。インディアナ大学のキャンパス内にある一般家屋のようなワークショップの建物の2階にあるオストロム先生の研究室はとても小さかったのが印象的であった。

今年3月末にRio+20前にロンドンで開催された Planet Under Pressure2012では、オストロム先生はこれからの地球環境変動研究の支柱となる ICSU の10年イニシアティブである”Future Earth”をスタートさせるための原動力となった。”Future Earth”ではさまざまなステークホルダーを計画段階から巻き込んだ文理融合型研究を推進する。合言葉は”Working Together”である。これはオストロム先生の2010年出版の著書のタイトルでもある。開会のあいさつでオストロム先生が「もうアクロニムはいらない。我々は Future Earth に行く。我々はきっと実現できる。」と言っていたことがとても印象的であった。

オストロム先生が地球研に滞在したのはわずか3時間ほどであったが、オストロム先生が

地球研のみならず日本の若手研究者へ残してくれたものはとても大きなものであった。オストロム先生は文理融合(transdisciplinarity)を実現しようと格闘している地球研の姿にとっても好意を持ってくださっていたようだ。この時に地球研でのセミナー開催を手伝ってくれたコモンズ研を中心とする研究員や院生の方々は今では立派な研究者や教育者となって日本におけるコモンズ研究を推進し、2013年6月に北富士で開催されるコモンズ世界大会で重要な役割を担っている。常に新しい研究への探求心を持ち続け、新しい仲間を世界各地で作っていくオープンな姿勢には我々研究者が学ぶべきものが多くあると思う。オストロム先生が本当に望んでいたのは一緒に研究をすることだったのではないだろうか。エリノア・オストロム先生の逝去2週間後に逝去された同僚であり良き支援者であった夫のヴィンセント・オストロム先生とともにご冥福をお祈りしたい。



第12回レジリアンス研究会で講演するオストロム先生（平成18年7月3日地球研で）